国際日本研究センター

International Center for Japanese Studies

NEWSLETTER 東京外国語大学 October 2021 No. 29

国際日本研究センター NEWSLETTER 第 29 号 目次

◆夏季セミナー・サマースクール 2021「COVID-19 下の人文学の現在」 (1)

◆講演会「コーパスを使った人称使用研究」 (3)

◆対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 33 回研究会 (6)

夏季セミナー・サマースクール 2021「COVID-19 下の人文学の現在」
2021 年 7 月 20 日～ 23 日　オンライン（ZOOM）開催

国際日本研究センター主催夏季セミナー・サマースクール 2021「COVID-19 下の人文学の現在」が、2021 年 7 月 20 日～ 23 日にわたって開催された。20 日の基調講演として尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学）のあと、夏季セミナーは 3 つのセクションの講演会がおこなわれた。以下のとおりである。20 日「セクションⅠ：オンラインによる日本語教育とコミュニケーション」、22 日「セクションⅡ：COVID-19 と文学研究」、特別講演として朴喆熙氏（ソウル大学）、坂本惠氏（日本大学、本学名誉教授）、23 日「サスティナブル人文学のために」、特別講演：野本京子氏（本学名誉教授）。またこれにあわせてサマースクールが、21 日と 22 日の両日にわたって開催され、国内外の 27 人の院生の研究発表がおこなわれた。

今年の夏季セミナーは 10 回目を数えると同時に、第三期中期計画の最終年度であることから、2017 年から夏季セミナーとあわせてすすめられてきた「日本語･日本研究コンソーシアム」の総括を兼ねた内容として構成された。2009 年の国際日本研究センター発足と、2012 年からはじまった夏季セミナーにご協力いただいてきた韓国、中国、台湾、シンガポール、タイの先生方に加えて、ヤギェロン大学、イルクーツク国立総合大学、リオデジャネイロ大学（ブラジル）、ラプラタ国立大学（アルゼンチン）の先生方の報告もあわせて、豪華なメンバーによるセミナーとなった。また、これまでのセンターの活動を振り返るセンター長からの報告と、歴代のセンター長である野本京子、坂本惠の両氏からの講演、そしてこれからの国際日本研究の方向性を提起してもらう意味で、東アジア日本研究者協議会国際学術大会の実績を踏まえた朴喆熙氏からの講演が、特別講演としておこなわれた。連日の参加者は 50 名を超え、盛況であった。COVID-19 の流行拡大という状況のなかで、zoom による開催となり、人文学の在り方も大きく変化している。最後の林学長からの閉会あいさつでは、10 年間のあいだに起きた、「アラブの春」からイラク、シリアの情勢の激変も参照された。国際日本研究をとりまく国際環境も、この 10 年の変化を無視することができない。いみじくも「COVID-19 下の人文学の現在」と題したこの夏季セミナーを足がかりにして、こうした変化に応えられる今後の日本研究を展望していきたい。

（友常勉）

Summer Seminar Report

From July 20 to 23, the International Center for Japanese Studies (ICJS) hosted the 2021 Summer Seminar, "Humanities Today in the Time of COVID-19." This year's summer seminar, the tenth of the series and mark-

ing the final fiscal year of the third medium-term plan, was designed to summarize the Japan Studies Consortium, held conjointly with the Summer Seminar since 2017.

The seminar was a great success, with over 50 people attending each day. The seminar is expected to motivate future Japanese studies to respond to these changes.

センター長報告

1　夏季セミナーのあゆみ

国際日本研究センターの第一回夏季公開セミナーは 2012 年 7 月 18 日～ 20 日に第一回夏季公開セミナー 2012「言語・文化・教育－国際日本研究の試み－」と題して開催された。講演は以下のメンバーであった。趙華敏氏（北京大学外国語学院）中国／徐一平氏（北京外国語 大学）中国／蕭幸君氏（台湾東海大学）台湾／尹鎬淑氏（サイバー韓国外国語大学校）韓国／任榮哲氏（中央大学校）韓国／三宅 登之氏、山口裕之氏、望月圭子氏（東京外国語大学）。これにシンガポール大学、タイ国立タマサート大学を加え、さらにコンソーシアム参加のヨーロッパの大学も加えて、この形式は 2019 年まで継続されてきた。また、2013 年から 「 サマースクール院生研究発表会 」もあわせて開催することになった。

2 「日本語・日本研究コンソーシアム」

それまでの夏季セミナーの蓄積と、セミナーと同時開催の各大学の大学院生の研究交流の場であるワークショップに参加し、交流を深めてきた海外の 10 の大学と「日本語・日本研究コンソーシアム」を 2017 年 2 月に設立した。このコンソーシアムでは以下の取り組みを行うことを目的としている。「参加機関間のネットワークの構築」「参加機関研究者間の共同研究の推進」「教育に関する連携・協力」「若手研究者の国際的交流を通じたネットワーク構築と育成」「各国における日本語・日本研究遂行上の課題の共有及びその解決に向けた取組み」。参加大学機関は以下の通りである。北京大学外国語学院日本言語文化学部、北京外国語大学北京日本学研究中心、韓国外国語大学校日本語大学日本言語文化学部、サイバー韓国外国語大学校、中央大学校（韓国）日本研究所、国立台湾大学日本語文学科、国立政治大学（台湾）日本語文学系、東海大学（台湾）日本語言文化学系、シンガポール国立大学

3　特設セッションと「次世代に向けた日本研究」

昨年の「言語・文学・社会――国際日本研究の試み」（2020 年 9 月 4 日～ 6 日）では、特設セッション「Covid-19 下の人文学」を設けて、COVID-19 のパンデミックに対応した日本研究・日本語教育の現状把握を目指した。また、新たにコンソーシアム加盟のために、南アフリカ・プレトリア大学およびステレンボッシュ大学からの参加も得た。

コンソーシアム事業の推進と同時に、「次世代に向けた日本研究」も課題としてきた。2018 年には国際シンポジウム「次世代に向けた日本研究の可能性―ポーランド・ロシア・ウクライナ―」を、2021 年には「次世代に向けた日本研究の可能性―南アフリカ―」を開催してきた。

4 「日本をたどりなおす 29 の方法」

これまでの国際日本研究センターの活動を代表するのは、日本語教育テキストである『日本をたどりなおす 29 の方法－国際日本研究入門』の出版である。

2015 年から、野本京子センター長と坂本惠副センター長のもとで立案・実現された『日本をたどりなおす 29 の方法――国際日本研究入門』（東京外国語大学国際日本研究センター編、2016 年）は、言語学・文学・歴史学・経済学などの人文諸科学の分野において、留学生教育の経験などのリサーチを踏まえて、東京外国語大学の教員が中心になってテキスト本文を書きおろして出版されたものである。しかもそれぞれのテキストについて、日本語教育の専門家たちによる全面的なチェックとタスクの設定が施されている。いわば本書はベストの布陣で作成された日本語教育の教材である。現在は教師用として 5000 字版の 2021 年度内発行をめざして編集作業をすすめている。

おわりに

2019 年の外部評価として、活動は「良好である」こと、「国際日本研究の「ハブ機能」を有する」こと、さらに「貴重な研究リソースを有する」ことが評価された。しかし、国際日本研究センターの設立時や、テキスト発行に匹敵するような「大規模な研究成果が生み出されていない」ことが課題として指摘されている。夏季セミナーで「特設セッション」を設けたことはその課題に応えようとする試みであるが、さらに研究テーマを深化させるなどして、日本研究の動向に研究内容を還元できるようなセンターをめざすことが求められている。

（友常勉）

From Center Head

Reflecting on the Summer Open Seminars, which began in 2012, ICJS has realized its function as the international hub for Japanese studies through the publication of the textbook, 29 Ways to Look Back over Japan, and the launch of special sessions and the series of workshops titled "Japanese Studies for the Next Generation." ICJS hopes to deepen its research themes and contribute content to Japanese studies trends.

講演会「コーパスを使った人称使用研究」
2021 年 9 月 4 日（土）10：00 ～ 11：35　オンライン（ZOOM）開催

国際日本研究センター対照日本語部門と科学研究費基盤研究 B(代表：スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン) との共催で講演会が行われた。

はじめに、科研の取りまとめを行っている本学野元裕樹准教授から、研究に関する趣旨説明があった。

当該基盤研究 B では、話し手・聞き手を指示する「代名詞代用表現（pronoun substitute）」と「呼びかけ表現（address term）」について、8 言語（日本語、朝鮮語、マレー語、インドネシア語、ジャワ語、タイ語、ベトナム語、ビルマ語）を対象として通言語的研究を行っている。「どのような表現が代名詞代用表現・呼びかけ表現として用いられるか？」という問いを立て、個別言語レベル、通言語レベルで、国際日本研究センターのメンバーを含む多言語の専門家が協働で記述・分析、言語資源構築を行っている。

その後、コーパスを使って人称使用の研究を行っている河野礼実氏（山梨学院大学）により、講演「日常会話における人称使用―『日本語日常会話コーパス（CEJC）』を材料に―」が行われた。講演の概要は以下のとおりである。

日本語の日常会話における人称使用について、その実態を探るべく、映像データも含む大規模日常会話コーパスである『日本語日常会話コーパス モニター版（以下、CEJC モニター版）』（124 会話／約 50 時間分／総発話語数約 60 万語）を用い、分析を行った。本講演では、（1）自称、（2）対称代名詞、（3）家族間会話に見られる呼称の 3 つの観点から分析結果を示した。

（1）CEJC モニター版に見られる自称

今回データから抽出された自称のうち、最も使用が多かったのは自称代名詞（2039 例）であり、次いで親族呼称が 136 例、名前（愛称含む）が 88 例であった。親族呼称および名前（愛称含む）に関しては、2 例を除き、家族・親戚間の会話で用いられていた。

自称代名詞は全部で 12 種観察されたが、そのうち「あたし」「おれ」「わたし」「ぼく」の 4 種が全体の 95%を占めていた。日本語の自称代名詞に関してはこれまで話者の属性、特に話者のジェンダーによる使い分けがかなり明確に区別されていると言われてきた（例えば、「「あたし」は女性にもっぱら使用され、「わたし」よりフォーマルである」や「「わたし」は男女ともに使用されるが、男性はフォーマルな場面で特に使用し、女性はフォーマルからインフォーマルまで幅広い場面で使用する」など）。しかし今回、実際の日常会話をデータに分析を行った結果、これまで言われてきたイメージや既成概念とは一致しない点も多く見られ、実際の自称使用はそれほど単純ではないということが改めて明らかになった。話者の属性、相手との関係性、会話の形式、場面等、同じ要素が揃ってい

ても、自称は同じとは限らず、それぞれの話者が言語資源から選び取っている様子がデータより観察された。

また、１人の話者が複数の自称を使い分けている例も数多く見られた。同一の話者が場面や相手に合わせて使い分けるだけでなく、同一の場面、同一の相手、さらには同じ話題の中でも複数の自称を使い分けている場合があった。こういった自称の使い分けにおいて、話者の社会的属性は影響する要素の１つに過ぎず、実にさまざまな要素が複合的に絡み合っていることを提示した。

（２）CEJC モニター版に見られる対称代名詞

対象データ内の対称代名詞の出現数は総発話語数の 0.04%であり、自称代名詞の約 10 分の１であった。使用数が最も多かったのは「おまえ」で、次いで「あなた」「あんた」「きみ」の順で出現が観察された。また、家族以外の相手より家族に対する使用が多く見られ、特に女性話者は圧倒的に家族に対する使用が多いことがわかった。加えて、講演内では、対称代名詞がフィラー的に使用されている例についても紹介した。

（３）家族間会話に見られる呼称

家族間会話における呼称に関し、誰が誰をどのように呼んでいるかを話者間の関係性から分析した結果、関係性ごとに傾向が見られた。講演では、①きょうだい間、②親子間、③祖父母孫間、④配偶者間の４つの関係性に分け、呼称の使用実態を紹介した。

関係性ごとの分析を通して、家族の最年少者を基準点にその呼び方が決まるという家族間呼称に関する基本原則にあてはまる例とあてはまらない例が観察された。あてはまらない例の出現の背景には、時代による家族・きょうだい間の関係性変化の影響が考えられる。また、同一の相手に対し、複数種の呼称を用いる話者も観察され、なかには呼称を一時的に対称代名詞に変えることで、相手に強く訴えかけたり、遊びの文脈においてキャラクタを演出したり、表現効果を発揮している例も観察された。ジェンダーの観点では、子どもが母親を呼ぶ際と父親を呼ぶ際の呼び方を比べたところ、その種類や頻度に差が見られた。加えて、夫婦間の呼称においても、発話量の差も大いに関係していると考えられるが、使用される呼称の種類とその頻度の非対称性が明らかになった。

（河野礼実）

当日は 50 名を超える学内外の研究者や学生が参加し盛況であった。日頃何気なく使っていて馴染みのある日本語の呼称や人称使用に規則性があることの発見は興味深く、活発な質疑応答が交わされた。

Online Lecture, "Corpus-Based Study of Personal Pronoun Usage," September 4, 2021 (Saturday, 10:00 – 11:35)

A lecture was jointly hosted by ICJS Contrastive Japanese Division and Grant-in-Aid for Scientific Research (B) (represented by Sunisa WITTAYAPANYANON).

First, NOMOTO Hiroki (Associate Professor, TUFS) explained the aim of the research activity funded by Grant-in-Aid ford Scientific Research (B).

This fundamental research explores pronoun substitutes and terms referring to the speaker or listener in eight languages (Japanese, Korean, Malay, Indonesian, Javanese, Thai, Vietnamese, and Burmese). The study discusses what expressions are used as pronominal substitutes and address terms in the respective languages.

Next, KAWANO Ayami (Yamanashi Gakuin University), who has been conducting corpus-based research on address terms, gave a lecture titled "The Use of Address Terms in Daily Conversation – based on 'Corpus of Everyday Japanese Conversation, CEJC.'" The outline of the lecture was as follows.

Kawano analyzed address terms in daily Japanese conversations using the monitor version of CEJC (124 conversations/50 hrs/60,000 words). She presented the analysis

results from three perspectives: 1) first-person, 2) second-person, and 3) address terms used in family conversations.

Of the self-address terms, pronouns were used most frequently (2,039 cases), followed by kinship terms (136 cases) and names (88 cases). Except for two cases, kinship nouns and person's names appeared in conversations between family members and relatives.

(1) First person pronouns found in the monitor version of CEJC

Among the 12 types of first-person pronouns found in the data, four types, *atashi*, *ore*, *watashi*, and *boku*, accounted for 95% of the total. The traditional view has been that the choice of Japanese first-person pronouns depends on the speaker's attributes, especially gender. However, this analysis has shown that actual linguistic practices do not always agree with the conventional notions and are more complex. Additionally, many speakers used multiple self-address terms, suggesting that the speaker's social attributes are only one of many elements to influence the choice of self-address terms and that there is a complex interplay of different factors.

(2) Second person pronouns found in the monitor version of CEJC

The second-person pronouns consisted of 0.04% of the total number of utterances in the target data, which is about one-tenth of the number of first-person pronouns. The most frequently used second-person pronoun was *omae*, followed by *anata*, *anta*, and *kimi*, in that order.

(3) Address terms used within a family

The analysis of family appellations was based on the speakers'relationships, who calls whom, and how they revealed a different tendency for each relationship. Kawano presented the actual usage of addressing terms, dividing them into four types of relationships: (1) siblings, (2) parent–child, (3) grandparent–grandchild, and (4) spouses.

The outcome was that not all the cases met the basic rule of the use of kinship terms, in which the family appellations are determined based on the viewpoint of the youngest member of the family. The examples that do not fit the rule may be the results of changes in family and sibling relationships over time. For instance, some speakers were observed using more than one addressing term for the same person. In some cases, they temporarily switched to a second-person pronoun to achieve an effect, whether for emphasis or to bring a particular nuance in a playful context. From a gender perspective, differences were observed in the types and frequency of children's addressing terms for mothers and fathers. Gender asymmetries were also found between married couples in the types and frequency of the terms of address.

(Ayami KAWANO)

The lecture was a great success, with an audience of more than 50 researchers and students from inside and outside the university. The discovery that there are systems in the use of address terms and personal pronouns in Japanese, which we employ intuitively every day, intrigued the audience and led to a lively exchange of questions and answers.

(Contrastive Japanese Division)

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 33 回研究会
2021 年 9 月 18 日（土）14:00 ～ 17:50　オンライン（ZOOM）開催

対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 33 回研究会が、2021 年 9 月 18 日（土）14:00 ～ 17:50　オンライン（ZOOM）で開催された。品川大輔氏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所：バンツー諸語）、川上茂信 氏（東京外国語大学：スペイン語学）の発表に続いて、野村剛史氏（東京大学名誉教授：日本語学）による講演が行われた。発表の概要は以下のとおりである。

「キリマンジャロ・バントゥ諸語の内的バリエーション―類型論的に希少な特徴を中心に―」
品川大輔氏

本発表では、系統的にはニジェール・コンゴ語族ベヌエ・コンゴ語派に位置付けられる一大言語群であるバントゥ諸語のうち、タンザニア・キリマンジャロ山麓で話されるキリマンジャロ・バントゥ語群（以下 KB）にみられる

言語構造上の多様性を、とくに類型的に希少な特徴に焦点を当てて紹介した。

冒頭でバントゥ諸語の系統の概略やバントゥ民族の大移動（いわゆる Bantu expansion）のルートに関する最近の研究成果に言及し、バントゥ諸語全体の中での KB の位置づけについて概観した。それを踏まえて、KB の構造的多様性を概観するために、動詞構造内部において表示される時制・アスペクト標識（TAM）の言語間対応を紹介した。KB は約 20 の地理的変種から構成される dialect continuum であるが、東からロンボ語群（Rombo）、中央キリマンジャロ語群（Central Kilimanjaro、CK）、西キリマンジャロ語群（West Kilimanjaro、WK）の 3 語群に分類される。これらのうち、ロンボ語ムクー変種（Rombo-Mkuu）、CK のヴンジョ語（Vunjo）とウル語（Uru）、WK のキボショ語（Kibosho）、ルヴァ語（Rwa）、シハ語（Siha）の 6 変種のデータを横断的に提示し、TAM の cross-categorical な対応を示した。そこから理解されるのは、地理的変種の多様性のみならずそれらの間に見られる規則的な対応関係の存在であり、それが KB 語群の分岐史の理解に対して一定の示唆を与えることを示した。

そのうえで、通バントゥ諸語的に、あるいは一般類型論的にも稀有であるような現象にしぼって、さらなる KB 内部のバリエーションを紹介した。

具体的には、1) 情報構造的な概念を表示する方向に発展している TAM 形式、2) 両唇ふるえ音を含む鼻音後ふるえ音（post-nasal trilling）、3) 句末否定詞（phrase-final negation paticle）の KB 内の多様性とその通時的変化、の 3 点について述べた。

1) については、本来はある種の未完了相を表示していたと推定される TAM 形式 we- が、ウル語においてはある種のフォーカス概念を表示する形式に変化していることを具体例とともに示した。これは、temporal な概念から情報構造に関する概念へという抽象化を伴う変化であり、変化のベクトルとしては divergence を促す方向のダイナミズムとみることができる。

2) については通言語的にも極めてまれな現象であり、その発生のメカニズムなど未だ不明な点が多い。ただし近年の共同研究によってこれまで未記述であったいくつかのバントゥ系言語においても類似の現象が観察されることが明らかになりつつあり、バントゥ諸語内部におけるこの現象の多様性と発達のメカニズムについての研究が緒に就いたところである。

3) についても、とくに東バントゥ諸語では比較的まれな現象であるが、なかでもグウェノ語（Gweno）に確認される、否定詞が主語の人称・数・クラスと一致するという現象は類型論的にも注目に値する現象である。KB においてはおそらくこの体系が祖体系であり、それが段階的に単純化していったとする変化のプロセスに関する仮説を紹介した。こちらの変化の過程は、convergence に向かうダイナミズムの一例ということになる。

このように、KB 内部の構造的多様性についての記述を積み重ねることで、KB 内部における分岐のプロセスに新たな知見をもたらしうることを論じた。

（品川大輔）

「スペイン語の認識モダリティ副詞」
川上茂信氏

スペイン語には quizá, quizás, tal vez, acaso, a lo mejor, igual, posiblemente, probablemente, seguramente など、伝統的に「疑いの副詞」と呼ばれる一群の副詞が存在する。これらについて調査した結果をいくつか報告する。

Quizá(s) には辞書や学習書が「たぶん」という訳語を当てることが多い。当然学生たちもそれを使うが、私の実感では「たぶん」は quizá(s) よりも確信度 (あるいは蓋然性) が高い。そこで、quizá などについてスペイン語の母語話者を対象に、「たぶん」などについて東外大スペイン語専攻の学生を対象に、インフォーマルなアンケートを実施した。その結果、「たぶん」が示す蓋然性のイメージは quizá, quizás, tal vez, acaso, a lo mejor のそれよりも高く、後者の日本語訳としては「かもしれない」の方が相応しいということが分かった。

最初に挙げた疑いの副詞は、従来の記述によれば a lo mejor と igual を除いて動詞の直説法とも接続法とも共起

する : Quizá viene (彼は来るかもしれない [直説法]) / Quizá venga (彼は来るかもしれない [接続法])。しかし、近年 a lo mejor も接続法と共起するという記述が見られるようになった。スペイン王立アカデミーのコーパスで見てみると、21 世紀になってからのデータでは a lo mejor と接続法の共起率は 4% 弱で確かに少ないが、存在は確認できた。

疑いの副詞と共起する直説法と接続法については、伝統的に疑いの度合いの違いがある (接続法の方が疑いが大きい・確信度が低い) と言われてきた。近年は、接続法全般を「判断中止」のモダリティとする理論を適用する説や、情報構造との関連で接続法と旧情報を結びつける記述などがある。上に紹介したアンケートでは、スペイン語話者は接続法のほうが蓋然性が低いと感じる傾向がうかがえた (違いを感じない話者もいるし、個別例では接続法の方が蓋然性が高いと答えた話者もいる)。この結果は伝統的な説明と親和性が高い。しかし、これは伝統的な説明の妥当性を示すというよりは、アンケートの回答者が受けた教育に起因する可能性を示唆する。

また、直説法とも接続法とも共起する副詞 quizá は、「(彼は) 来るかもしれないし、来ないかもしれない」のように相矛盾する命題を並置する場合、直説法と共起できない (*Quizá viene, quizá no viene) という説がある。それに対する反論もあるが、どちらもデータを明示せずに議論している。そこで、quizá, quizás, tal vez, a lo mejor, igual と直説法 viene、接続法 venga の組み合わせによるアンケートを行った (ADV viene, ADV no viene. / ADV viene, ADV no venga. / ADV venga, ADV no viene. / ADV venga, ADV no venga.)。結果として、quizá, quizás, tal vez については、両方直説法のパタンを自分で言うという人は確かに少ないが、大部分の回答者は聞いたことがあることが分かった。従って «Quizá viene, quizá no viene» にアステリスクは必要ない。一方、quizá, quizás, tal vez は両方接続法のパタンを自分で言うと答えた人が多い。これは、これらの疑いの副詞は接続法とともに使うのが「正しい」という規範的圧力の存在を示唆する。

なお、伝統的に直説法とのみ組み合わさるとされてきた a lo mejor については、接続法との共起を聞いたことのある回答者が少数いた。直説法との共起しか報告されていない igual についても、接続法とともに言う、あるいは聞いたことがあるという人が少数いた。A lo mejor と igual は疑いの副詞として使われるようになったのが比較的新しく、これから接続法との共起が増えていく可能性がある (逆に直説法のみが正しいという規範的圧力が働いて接続法の使用が増えない可能性もある)。

さらに、コーパス調査によって疑いの副詞の重複使用という興味深い事実が明らかになった。特に、蓋然性が大きく異なる seguramente (「たぶん」〜「きっと」) と quizá のような組み合わせが散見される。個々の副詞が全体の意味にどのように寄与しているのか、今後の検討課題としたい。

（川上茂信）

「日本語アスペクト史」
野村剛史氏

野村氏の御講演は、ス、ツ・ヌ、タリ・リからなる古代語のアスペクト体系からスル、シタ、シテイルからなる現代語のアスペクト体系への変化がどのような過程を経たものか、そしてその変化は本質的にどのような変化とみるべきものかについて、中世における変化の詳細の探求をとおして解明を試みたものであった。論点は多岐にわたるが、その主筋をまとめれば次のとおりである。

古代語のタリ・リ、現代語のテイル・テアルは、どちらも①存在様態を出発点として、②動作継続（進行状態）、③（変化の）結果状態、④単純状態、⑤完了（動作完了）を表す。①〜④は何らかの意味で「状態」を表すので「状態性」ということができ、それに対して⑤は動作・作用が終結済みということで「動作性」だと言える。①〜④はシタに置き換え不可能であるのに対して⑤はシタに置き換え可能である。

① テーブルの上にリンゴが転がっている。　×リンゴが転がった

② 太郎が本を読んでいる。ポチが外を歩いている。　×ポチが歩いた

③　水が白く濁っている。　　×白く濁った

④　山田さんは四角い顔をしている。　　×四角い顔をした

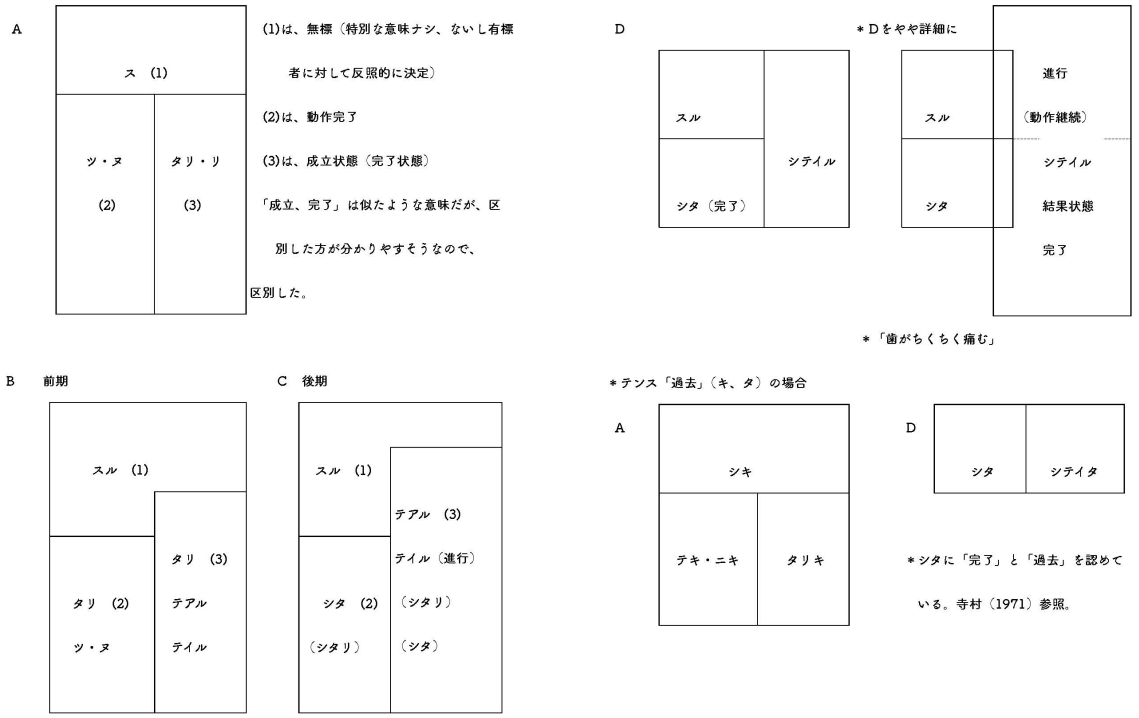
⑤　もうその家から引っ越している。　　〇もう引っ越した

ただし、上代のタリ・リでは⑤完了は非常に少ない。また②動作継続も非常に少ない。これは、タリ・リを構成しているアリが意志的エネルギーに乏しいことと関係するものと思われる。

③結果状態は動作（変化）が完了して、その結果の状態になっていることであるのに対し、⑤は動作が終結完了している点で③と同じだが、後の状態を問題にしないものである。タ・ツ・ヌは⑤のみを表す。テイルの表す⑤はなんらかに「後の状態」が現れているようなところがあるのに対し、シタ、ツ・ヌは、後の状態を問題にしていない点で異なる。

古代語のアスペクト体系は無標のス（特別な意味なし）(1) に動作完了を表すツ・ヌ (2) と成立状態（完了状態）を表すタリ・リ (3) が対立する体系であった（図 A)。中世前期にはタリが (2) 動作完了の用例を増加させツ・ヌの例が減少する一方、(3) 成立状態を表す形式としてテアル・テイルの用例が増加し、スが表していた②進行を表すようになった（図 B)。中世後期にはタリ＞タが (2) 動作完了の領域を占める一方、(3) 成立状態を表す例が衰退した。（図 C）現代語ではタが (3) 動作完了を表し、スルは一部の例を除き②進行を表すことがほぼなくなった。現代語においては、シテイルがスルに対して②進行（動作継続）を表し、シタに対して③結果状態、⑤完了（動作完了）を表すという体系をなしている。（図 D）

図 A ～ D（野村剛史氏）



中古から中世前期にかけてのタリ・リとツ・ヌの用例数の推移を調査した。タリ・リの例を状態性の意味を表すもの（タリ状）と動作性の意味を表すもの（タリ完）とに分けて集計すると、タリが増加し、ツ・ヌが減少していると同時に、タリ完の用例数がタリ状とツ・ヌの双方に対して増加している。用例数の比率のみ右に示す。

	タリ状	タリ完	ツ・ヌ完了	計
源氏	46%	16%	38%	54%
今昔	29%	24%	47%	71%
宇治拾遺	33%	26%	41%	67%
延慶本平家	32%	31%	37%	68%
覚一本平家	33%	37%	30%	67%
西源院本太平記	28%	44%	28%	72%

日本語のアスペクト体系は、中央語の状況（スル・シタ・テイル）のみ見るならば３項対立であり、その点で英語（基本形・進行形・完了形）と似ている。しかし、西日本の諸方言がスル・シタ・ヨル・トルの４項対立であることを参照するならば、あるいは、中古・中世の「動詞＋ヰル」をアスペクト体系の一角をなすものとして積極的に位置付けるべきかもしれない。

以上は永年の御研究の蓄積の上に立った、日本語アスペクト史を俯瞰する御講演であった。もともと状態性の意味を表していたタリ（＞タ）が動作性の完了を専ら表すようになり、ツ・ヌにとって代わる一方、状態性の意味の領域をテアル・テイルに譲っていったという図式は従来も言われてはきたものの、実際に用例数の比率の推移として実証されたのは、野村氏の精力的な研究活動の成果として聴衆は大いに感銘を受けた。その後の質疑も御講演の深みを反映して有意義なものであった。

（川村大）

当日は 80 名近い研究者や学生が学内外から参加し、質疑応答も活発であった。

（対照日本語部門）

The 33rd “Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop

The 33rd “Contrastive Linguistic Research on Japanese and Foreign Languages” Workshop, organized by the Contrastive Japanese Division, was held online (via Zoom) on September 18, 2021. Lectures were given by SHINAGAWA Daisuke (Bantu languages, ILCAA, TUFS), KAWAKAMI Shigenobu (Spanish linguistics, TUFS), and NOMURA Takeshi (Professor Emeritus, Japanese Linguistics, University of Tokyo).

“Internal Variation in Kilimanjaro Bantu Languages: Focusing on Typologically Characteristic Features,” by SHINAGAWA Daisuke

Kilimanjaro Bantu languages (hereinafter referred to as KBs), spoken at the foot of Mt. Kilimanjaro, Tanzania, belong to the Bantu languages, a large language family and a subgroup of Benue-Congo, which in turn falls under the Niger-Congo branch. This presentation dealt with the structural diversity of KBs, particularly focusing on their typologically rare features.

First, Shinagawa gave an overview of the research to date, including an outline of the Bantu languages’ phylogeny, the route of the great migration of the Bantu peoples (the so-called Bantu Expansion), and the position of KBs in the Bantu languages.

Then, he introduced crosslinguistic correspondences of tense, aspect, and mood marking (TAM) that appear in verb structures, presenting a general overview of the KBs’ structural diversity.

Finally, focusing on rare phenomena from both cross-Bantu and general typological viewpoints, the lecturer further illustrated the group-internal diversity of the KBs.

The lecture demonstrated that the accumulated descriptions of the KBs’ structural diversity could provide new insights into the historical process of their diversification.

(SHINAGAWA Daisuke)

“Spanish Epistemic Modal Adverbs,” by KAWAKAMI Shigenobu

The Spanish modal adverb quizá(s) is often translated to *tabun* in Japanese dictionaries and grammar books. We thus conducted informal questionnaire surveys on quizá(s) and other expressions targeted at native Spanish speakers and TUFS students majoring in Spanish. The results suggest that *tabun* expresses a higher degree of probability than quizá, quizás, tal vez, acaso, or a lo major. The results also indicate that *kamo shirenai* is a more appropriate Japanese translation of those adverbs.

According to traditional descriptions, the adverbs of doubt co-occur with both indicative and subjunctive verbs except for a lo mejor and igual. However, there have been descriptions of a lo mejor co-occurring with the subjunctive in recent years.

When co-occurring with an adverb of doubt, the subjunctive expresses a greater degree of doubt and a lower

probability. Recently, there have been theories to regard the subjunctive in general as the modality of "suspended judgment" or to link the subjunctive and old information relating to the information structure. The surveys mentioned above show that Spanish speakers tend to consider the subjunctive to indicate a lower probability.

Some theories state that the adverb quizá, which co-occurs with both the indicative and the subjunctive, cannot co-occur with the indicative (*Quizá viene, quizá no viene) when juxtaposing contradictory propositions as in "(he) may come or may not come." Therefore, we conducted a questionnaire concerning the use of the adverbs, quizá, quizás, tal vez, a lo mejor, and igual, with the indicative viene and the subjunctive venga. Most of the respondents had heard quizá, quizás, and tal vez used with two indicative verbs (viene) although they would not use the combinations themselves. On the other hand, most respondents answered that they would use the adverbs quizá, quizás, and tal vez with two subjunctive verbs (venga).

As for a lo mejor, an adverb traditionally thought to be combined only with the indicative, a few respondents had heard it co-occur with the subjunctive. A lo mejor and igual are relatively new in their use as adverbs of doubt, and their co-occurrence with the subjunctive may increase in the future.

(KAWAKAMI Shigenobu)

"History of Japanese Aspect System," by NOMURA Takeshi

Nomura's lecture discussed the transition of Japanese aspect system from Old Japanese, -*su*, -*tu*, -*nu*, -*tari*, and -*ri*, to Modern Japanese, *suru*, *shita,* and *shiteiru*. In this lecture, Nomura shed light on the essential nature of the aspectual shifts in Japanese by exploring the details of the changes throughout the Middle Ages.

Old Japanese suffixes, -*tari* and -*ri*, and their modern counterparts, -*teiru* and -*tearu*, both express

(1) a state of being,

(2) the continuation of action (progressive state),

(3) a resultant state (of a change),

(4) a simple state, and

(5) the completion of an action.

Whereas (1) through (4) represent a "state" and can be categorized as "stative," (5) can be classified as "activity" because the action/effect is completed. Also, while (1) through (4) cannot be replaced with *shita*, (5) can be replaced with *shita*.

However, in Old Japanese, -*tari* and -*ri* rarely signify the completion or continuous state of an action, which may be due to the low volitional functionality of -*ari* that is contained in -*tari* and -*ri*. (3) The resultant state entails the state after the completion of an action or a change. Similarly, (5) denotes a completed action, but it differs from (3) in that (5) does not imply any relevance to the state after the action. Japanese suffixes -*ta*, -*tu*, and -*nu* represent only (5). While -*teiru* somehow presents the situation after the action when denoting (5), -*shita*, -*tu*, and -*nu* do not concern the later state.

The aspect system of Old Japanese consists of a ternary opposition of

(i) unmarked -*su*,

(ii) -*tu* and -*nu* to represent the completion of an action, and

(iii) -*tari* and -*ri* to represent the established state.

In the Early Middle Ages, -*tari* was increasingly chosen over -*tu* and -*nu* to denote (ii) the completion of an action. Simultaneously, -*tearu* and -*teiru* were used to signify (iii) established states, replacing -*su* to express (2) the continuation of an action. In the later Middle Ages, (ii) the completion of an action was mainly expressed by -*tari* and -*ri*, though their use to express (iii) the established state declined. In Modern Japanese, -*ta* expresses (ii) the completion of an action, and -*suru* rarely, with a few exceptions, denotes (2) a progressive. In Modern Japanese, -*shiteiru* expresses (2) a progressive (as opposed to -*suru*), and (3) the resultant state and (5) the completion of an action (as opposed to -*shita*).

The transitions concerning -*tari*, -*ri* , -*tu*, and -*nu* from the pre-medieval through the medieval times was investigated. Dividing the occurrences of -*tari* and -*ri* into two groups, stative (*tari*-stative) and active (*tari*-completive), showed that -*tari* increased while -*tu* and -*nu* decreased, and *tari*-completives increased compared to both the *tari*-statives and -*tu* and -*nu*.

Looking only at standard Japanese, its aspect sys-

tem can be identified as ternary (*-suru*, *-shita*, *-teiru*), similar to English with its simple, progressive, and perfect aspects. However, various dialects in Western Japan have a four-term opposition of *-suru*, *-shita*, *-yoru*, and *-toru*. Thus, we should probably include the pre-medieval and medieval "verb + yeru" as a part of the aspect system.

The lecture was based on the rich foundation of Nomura's extensive research, offering a comprehensive view of Japanese aspect history. The suffix *-tari* (> *-ta*), which originally denoted stative meaning, later expressed the completion of an action exclusively, replacing *-tu* and *-nu*. At the same time, the stative-*tari* was gradually replaced with *-tearu* and *-teiru*. Although this aspectual transition is commonly acknowledged, the audience appreciated learning the actual percentage change in usage instances, an achievement impossible without tireless research. The question and answer session following the lecture was also meaningful, reflecting the depth of his lecture.

(KAWAMURA Futoshi)

The lecture was attended by nearly 80 researchers and students from inside and outside the university. The participants had a lively question and answer session over the extensive research.

(Contrastive Japanese Division)

東京外国語大学国際日本研究センター　イベントポスター（4 月～ 10 月）

「夏季セミナー 2021」2021 年 7 月 20（火）～ 23（金）

講演会「コーパスを使った人称使用研究」（2021 年 9 月 4 日）　「外国語と日本語との対照言語学的研究」第 33 回研究会（2021 年 9 月 18 日）

発行：東京外国語大学国際日本研究センター
〒 183-8534　東京都府中市朝日町 3-11-1　アゴラグローバル 2F
TEL 042-330-5794 Email info-icjs@tufs.ac.jp
ウェブサイト URL jttp://www.tufs.ac.jp/icjs/